

東海の古代

第268号 2022年12月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像の出自

刈谷市 酒井 誠

1 広隆寺の二体の弥勒菩薩半跏思惟像

京都太秦にある広隆寺は、蜂岡寺、秦寺、秦公寺とも呼ばれ、京都最古の歴史を有する寺として有名である。しかし、実際は古代において移転を繰り返して、そのいくつかの寺の本当の関係はわかっていない。奈良の法隆寺や大阪の四天王寺とともに聖徳太子信仰の寺としても有名で、中でも霊宝殿に安置されている「宝冠弥勒」と「泣き弥勒」（宝髻弥勒）の二体の木造弥勒菩薩半跏思惟像は、ともに国宝に指定されている。しかも、宝冠弥勒は、国宝の1号である。特に、宝冠弥勒は韓国の国宝83号弥勒菩薩半跏思惟像にその形が酷似しており、（私はそうは思わないが）重要な関係があると指摘されて取り上げられてきた。この宝冠弥勒は、その美しさのあまり近づきすぎて思わず触れて指先が破損したことで有名になった。また、韓国の学者や学生が日本を訪れた際には、この寺を訪れ、「この仏像は昔の韓国で作られて、今では日本でしか見られない。」というような話を聞く。ちなみにこの体形のまねをすることは勧めない。足がつってしまっ困ることになる。



宝冠弥勒



泣き弥勒 (宝髻弥勒)



韓国国宝83号仏像

2 広隆寺の成り立ち

西暦600年ごろに建立された寺には、奈良の飛鳥寺（元興寺）、法隆寺、四天王寺、広隆寺が挙げられる。『日本書紀』推古紀十一年（603年）に聖徳太子が、「私が貴い像を持っ

ているが、誰かこの仏像をもって礼拝するものはいないか。」と聞いたところ、配下の秦河勝が「臣が拝します。」と申し出て、蜂岡寺を作ったことになっている。それがどちらの木造仏であるか不明である。また、蜂岡寺と広隆寺の関係は解明されずに、後の時代に見つかった北野廃寺との関係も研究段階である。

私は、以前京都の渡来人の研究に取り組んできたのであるが、確かに太秦や嵯峨野、松尾、あたりには「秦氏」の残した業績が横たわっている。桂川に井堰、および人工の水路の建設、松尾大社や伏見稻荷の建設、太秦地方の養蚕など秦氏との関連の遺跡は多い。同様に宇治の地にも秦氏の活躍の跡が見られる。

3 宝冠弥勒と泣き弥勒（宝髻弥勒）の材質

(1) 宝冠弥勒

この時代の仏像は、日本ではクスノキ材で寄せ木造りのものが多い。しかし、この仏像は、日本ではまれなアカマツ材の一刀彫で、一部の部材としてクスノキが使用されている。ティアラ形式の宝冠は中国や日本の菩薩像には類例がなく、韓国の金銅仏に類似を見る。現在では、韓国産とみている意見が多いが問題点も多い。クスノキは、韓国本土ではほとんど育ちにくく、済州島の一部にしかない。日本では、アカマツを使った仏像は他にない。

(2) 宝髻弥勒

こちらの仏像は、全体がクスノキで作られており、下半身の裳なども別に作ってあわされている。韓国にはこうした優れたクスノキがないために日本産と考えられる。百済はアカマツ文化、新羅はクスノキ文化と言われる。

4 宝冠弥勒の製作地

私は、宝冠弥勒が作られた時代、場所、製作者を考えると、まさに「韓国と倭国の境界線」で完成した仏像であるという気持ちになる。

美術史家の岩崎和子（元東京成徳大学教授）氏は、韓国83号仏像を7世紀半ばころの新羅での製作とみなして、宝冠弥勒をそれより先行作と捉えている。つまり7世紀上半旬の百済制作とみている。確かに、最近慶州の地でクスノキ製の棺材が見つかっており、日本から輸入されたものとみられる。アカマツとクスノキは調達可能である。しかし、私は韓国国宝83号仏像に似ているのは、大阪の野中寺や奈良の神野寺の金銅製の仏像の方と考えている。



韓国国宝83号仏像（再掲）



野中寺弥勒菩薩



神野寺弥勒菩薩(火災にあう)

多くの学者が宝冠弥勒を韓国産、新羅産、百済産と説明する中で、私は日本で作られた

ものと思っている。中国大陸や朝鮮半島から戦火を逃れて日本列島に渡ってきた仏師がたくさんいる。飛鳥寺の大仏は、仏像の一部しか残存していないが、日本に渡ってきた渡来人の末裔の「止利仏師」の作とされている。弥勒菩薩像は2、3世紀からインドや中国、韓国でたくさん作られて日本にも伝わってきた。しかし、そのほとんどが金銅仏であり、木造仏は少ない。韓国は元来木材資源が乏しく、山地が岩盤でできており、気候も寒冷であるために植生が豊かではない。日本では、奈良国立博物館の「なら仏像館」では、実に多彩で数多くの木造仏の残欠が紹介されている。

韓国でも古代から木造仏が造られていたならば、こうした「残欠」が残っているはずである。今までにいくつかの文献を漁ったが、残欠を目にすることはなかった。さらに、韓国の文化と日本の文化は歴史上のどこかで、金属文化と木製文化に分離したと考えている。箸、椀、家、家具、仏像、その他多くの点で、日本は木の文化が生きている。弥勒菩薩の由来は明らかに韓国経由で伝わったものであろう。しかし、これらの一部の木造弥勒菩薩を編み出したのは、日本国内ではないかと思うのである。この左下の金銅製の仏像は、長崎県の民家から見つかったものであるが、およそ3、4世紀に作られたものらしい。

この後の時代では、日本の仏像は木像の彫刻が圧倒的に増えて、多くの仏師たちが活躍する時代へと突入する。その中心は、遷都とともに奈良から京都に移ることになる。



日本二十六聖人記念館



奈良国立博物館・木造仏の残欠

5 金銅製の弥勒菩薩の広がりから木造仏への移行

663年の白村江の戦いで、多くの百濟人が文化を携えて日本に渡ってきた。その人たちによって弥勒菩薩を中心にした金銅仏が製作されたのではないかと思う。ただし、「弥勒菩薩」という言葉もはっきりせず、地藏菩薩の一部とする意見もある。やがて日本では中心が木造仏へと移行する。このようにして、韓国と日本の文化は次第に離れてゆく。

明治期の寺は、廃仏毀釈のあおりを受けて生活に困窮していた。そのために多くの文化財を売って生活を凌いでいた。海外への流出も起きたのだ。改修前の宝冠弥勒は、ふくよかでおなかも出ている。現在の仏像と比べても繊細さに欠ける。私は、この修復作業で韓国の国宝83号金銅物を参考にしたのではないかと疑っている。

<資料・明治期の改修以前の半跏思惟像>現在と違ってふくよかである。

韓国の国宝83号金銅像を参考にしたのではないか？



改修前の弥勒（多くの仏像に後背がついていたようだ。現在はついていない。）

6 まとめ

- (1) 広隆寺の宝冠弥勒菩薩半跏思惟像は、アカマツで作られていることから百濟製とする研究も多いが、裳や台座はクスノキであり彫刻技術の歴史を見ても日本製と考えられる。また、木造仏の残欠が韓国には出土せず、アカマツの彫刻の方法が反りを相殺するため木裏を表側として彫っており、西村公朝東京芸術大学名誉教授（仏像修理技師）は日本に献上されたアカマツ材を用いて日本で作ったとされ、私も同感である。
- (2) これらの仏像が日本にもたらされた6世紀から7世紀にかけては、朝鮮半島と日本列島の間で倭人の交流が盛んであったと思われるが、これ以降は韓国の金属文化と倭国の木の文化がはっきりと分かれ、それぞれ独自の歴史をたどったと考える。
- (3) 半島南部と九州に倭国文化が混在していた時代の最後の生き証人が、宝冠弥勒と宝髻弥勒の二体の弥勒菩薩像であると考えられる。

尾張地方に於ける須恵器の歴史

一宮市 畑田 寿一

通説では、須恵器は5世紀の初めに陶質土器の製法として朝鮮半島から伝わったとされ、その製法は最初にヤマトの陶邑に伝わり、ヤマト政権の主導の許、日本全国に伝わったとされている。

しかし、発掘が進むにつれ、陶邑より古い須恵器が登場し、九州ではヤマトと同じ時期に独自の須恵器が存在することが判明するなど、従来説は見直しを迫られている。

尾張地方に於いても、最も古い東山窯（名古屋市）について、時代の遡りの可能性が指摘されており、今一度状況をまとめ直してみたい。

なお、従来、国内で生産された陶器を「須恵器」、朝鮮半島からの伝来の品を「陶質土器」と呼んでいたが、これらの区分もあいまいになったので、今回は「須恵器」で統一する。

1 国内での須恵器の歴史

奈良大学の植野浩二元教授に拠ると、須恵器は5世紀前半に朝鮮半島から伝わり、九州から尾張まで各地で一斉に造られるようになった。最も初期の形式は陶邑の大庭寺遺跡と考えられている。その後ON46 (TK208) 形式の土器に代わり、東北まで広がった。最後はTK23形式の土器になり、残りの関東、北陸をもって日本全国に広まった。須恵器の技術はその後の埴輪、白色系陶器の制作に引き継がれ、土師器に変わる文化を創り出したとしている。(参考)400~500年の須恵器の型式の推移 TK73-TK216-YK208 (ON46) -TK23・TK47

上記の説には、現在でも異論が存在するが、前述のヤマト主導論はほぼ姿を消していると言える。

2 東海地方での須恵器の歴史

愛知県史に拠ると、東海地方の須恵器は名古屋市昭和区の山崎川上流にある東山111号窯から始まった。形式はTK216で5世紀後半と考えられているが、消費地に当たる名古屋市中区の伊勢山中学校遺跡や西区の志賀公園遺跡からは更に古い須恵器が発見されており、5世紀前半まで遡る可能性が指摘されている。

更に豊橋市の水入遺跡からも初期の形式を持つ須恵器が発見されており、愛知県全域は須恵器の先進地であった。なお、東山窯を猿投古窯地域と呼ぶが、当初の想定では豊田市の猿投山を中心地と考えていたが、中心地が西にずれたため地域名としては不適切になっている。

8世紀に入ると祭祀の方法の変化に伴い、国内の他の地方須恵器の生産は下火になるが、この地方では美濃を中心に窯業が盛んになり、一大産地となった。

7世紀後半の飛鳥浄御原宮で使われていた須恵器の半分が尾張地方のものになったとする説もある。

この要因は、

新製品の開発

薄造りのスマートな形の食器や内側に黄色の土を貼った大甕など、祭祀よりも生活用具に視点を置いた新製品の開発。

窯の改良

穴窯の傾斜を強くして、焼き上がりを均一にするとともに、重ね焼きを可能にして採算性を向上。

釉（うわぐすり）の開発

灰釉から緑色の釉の開発などに努め、他の生産地との差別化を図る。

が挙げられるが、しかし、最大の勝因は、「良質な陶土」と「豊富な燃料」に在ったと考えられる。特に燃料の木は一度伐採すると30年以上の育成期間を必要とし、操業の継続には広大な里山を必要とした。

3 まとめ

以上、最新の研究結果から須恵器の歴史を眺めてきた。20年程前に言われていたヤマト主導の伝播説は見直しを迫られていると言える。

当時の歴史を俯瞰してみると次のようになる。

4世紀の後半に瀬戸内海西部を中心に神功皇后を中心とする勢力が興った。

通説では神功皇后は伝説の人物とされているが、朝鮮半島の歴史書や広開王碑などを見る限り、高句麗と対峙できるほどの勢力が存在していたことが窺われる。

勢力は北部九州を配下に治め、朝鮮半島南部の勢力と結託して朝鮮半島一体に影響力を及ぼした。倭の五王の時代の始まりである。

朝鮮半島の緊張が高まるとともに大量の難民が日本列島に押し寄せた。朝鮮半島における

前方後円墳、倭製甲冑、横穴式石室、馬と馬具など双方の文化の交流が盛んになり、須恵器もその1つとして主に伽耶系渡来人によってもたらされた。

須恵器の前に瓦質土器の存在がある。起源は4世紀後半とされており、詳細は不明であるが、伽耶系渡来人の渡来と関係が深い。5世紀に入ると器の製法が温度の高い須恵器に代わる。

5世紀後半、沖ノ島の岩陰祭祀においては、須恵器とともに甲冑、鏃などが大量に奉納されるようになる。従来の航海安全ではなく、必勝祈願が祭祀の主体となり、倭の五王の時代の世相を表していると言える。

播磨国の現在の姫路城付近は伽耶系渡来人の分布が濃い地域であるが、難波の陶邑とともに初期須恵器が出土する。本州ではこの付近が須恵器の発祥の地では無かるうか。

結局、新しい技術を持った工人が渡来して各地に須恵器を広めたのではなく、焼き物を得意とする工人がおり、彼らが新しい技術を習得したと考えるべきである。従って下地は整っており、伝播は一斉であった。何処が最初かの論議は本質的ではない。

東海地方の遺跡で須恵器が出土する場合、5世紀後半から6世紀と位置付けてきた。その結果、例えば志段味遺跡などでは5世紀ごろ一旦衰退して6世紀になると復活するとされている。しかし、尾張全体の流れを見る限り、6世紀には熱田地方に中心が移っており、流れに無理があるように見える。「しだみ古墳群ミュージアム」を訪れると従来の概念では時代の違う須恵器が出土品として展示されているが、尾張での須恵器の登場は5世紀前半と考えるべきであろう。

舶載か仿製か

名古屋市 石田 泉城

1 須恵器と土師器

日本の古代についての解明は、いろいろな仮説が乱立して、なかなか進みません。

もともと史料や遺跡・遺物が少ないことに限界があるのは否めませんが、いつまでも史実が集約化されない原因のひとつには、固定観念があるからではないかと思えます。

たとえば、須恵器の起源は 朝鮮半島南部の伽耶とされ、一般的にその伽耶は倭の領域ではないという立場で古代を捉えます。しかし、私は、伽耶は倭の領域と思えます。というのも日本列島の初期の須恵器は半島のものとは全く区別が付きません。瓜二つのものを区別して考えるほうが誤りではないでしょうか。

土師器は、地面に掘った浅い竪穴などの野焼きで作られ焼成温度が800～900度と低く赤みがかかりますが、須恵器は陶質土器で地下式などの登り窯を用いて土師器より高温の1100度以上の焼成で還元されるため青みがかかります。須恵器は基本的には釉薬(ゆうやく、うわぐすり)をかけませんが、窯の燃焼中に燃料である薪の灰が土器に付着し、それが高熱で融解してできたものです。

ですから、土師器と須恵器では根本的に製造方法が違うものの、当然ながら須恵器は、弥生土器の流れを汲んだ土師器の製造で培われた技術が基本にあることは言うまでもありません。

2 半島の倭人

現在の国境を念頭に置くのではなく、もう少し柔軟に考えないと古代の姿を見誤ると私は考えています。朝鮮半島南部には倭人が住んでいた、その歴史事実をきちんと踏まえれば、須恵器は、九州と朝鮮半島南部に跨がった倭人の文化といえるでしょう。

倭人が半島にいた証拠は、『日本書紀』と『隋書』にあります。

<日本書紀>

・欽明二年七月条 日本卿等，久住任那之國

<隋書>

・『隋書』百濟伝 其人雜有新羅・高麗・倭等，亦有中國人。

欽明紀には日本の高官らは久しく任那の国に住むとあり、『隋書』には、百濟には、倭人を始め新羅・高句麗・中國人が居住したとあります。当時の朝鮮半島には、これらの民族が混在しており、特に任那には多くの倭人がいたと考えられます。

3 舶載か仿製か

舶載（外国製）か仿製（国内製）か、考え方が大きく分かれるのは、古代青銅器を代表する三角縁神獸鏡です。

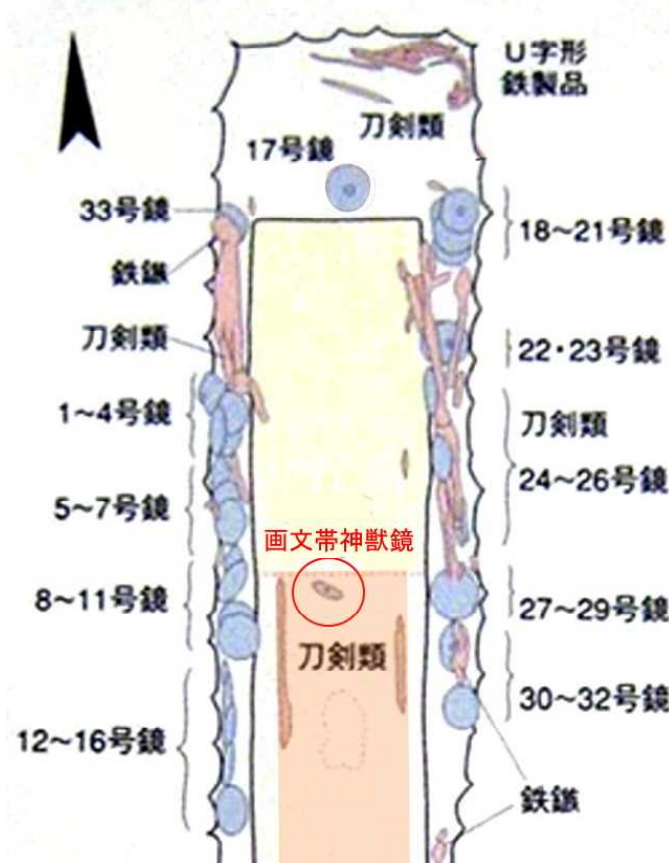


黒塚古墳は、天理市にある全長約130mの方円墳で3世紀後半に築造されたと考えられており、崇神天皇陵に治定されている行燈山古墳の西に位置します。

石室内からは、銅鏡34面のほか、刀剣類27口以上、鉄鏃170本以上、各種鉄製品、甲冑、農

工具類、漆塗り製品、土器類など多数の副葬品が出土しています。

黒塚古墳銅鏡出土図



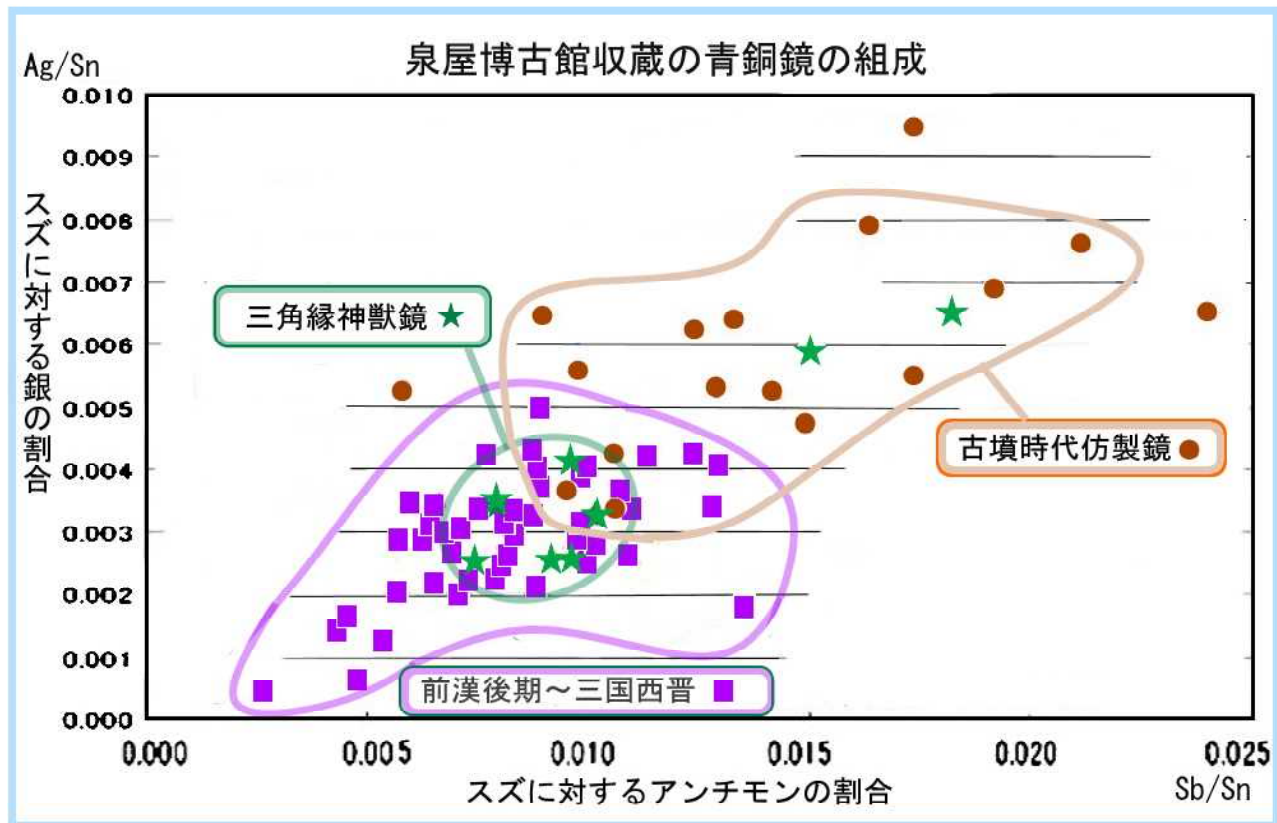
石室中央の粘土棺床上には長さ約6.2mの割竹形木棺が安置され、その木棺内には、北枕で安置された被葬者の頭の上に立った状態の画文帯神獸鏡1面とその両側に刀剣があり、木棺外には三角縁神獸鏡33面や刀剣類が被葬者の頭部をコの字形に取り囲むようにして並べられていました。

出土した33面の三角縁神獸鏡の平均の直径は、21.8cmで、木棺内に置かれた画文帯神獸鏡は、直径13.5cmで三角縁神獸鏡より二回り小さいものです。私には、被葬者にとって小さな画文帯神獸鏡の方が大きな三角縁神獸鏡より重要な鏡であると感じられました。

中国青銅器を専門とする泉屋博古館（京都市）が大型放射光施設「スプリング8」で泉屋博古館所蔵の銅鏡を蛍光X線分析し、鏡に含まれる錫、銀、アンチモンの3元素の組成数値を調べたところ、紀元前1世紀～3世紀の前漢後期から三国時代にかけての鏡の組成とほぼ一致し、前

漢・三国時代の原材料と類似していると考えられました。

しかし、これをもって製造場所が中国大陸であるとするのは早計です。



というのも、^{せんおくほくこかん}泉屋博古館の分析結果をみれば、分析された8面の三角縁神獣鏡のうち銀、スズ、アンチモンの割合が同じような6面は、前漢後期から三国・西晋時代の中国鏡の範疇に集中していますが、一方で、そのほかの2面はそれから大きく外れ、総じて三角縁神獣鏡は、古墳時代の仿製鏡にも重なっていると見ることもできます。いずれにしても金属の組成だけでは原料の産地がわかるのみで、また、サンプル数が少ないことから、銅鏡の製作地を定められないのは自明です。

三角縁神獣鏡は、日本列島内では500枚以上発見されていますが、中国大陸では1枚も確認されておらず、議論はあるものの中国大陸製とする説は否定されるでしょう。

また、三角縁神獣鏡は、西暦240年に魏の皇帝から邪馬壹國の女王卑弥呼に贈った銅鏡百枚とする説がありましたが、先述のとおりこれまでに500枚以上の出土があり舶載鏡の可能性が非常に低いので、卑弥呼の鏡とする仮説も現在は否定的です。

金属組成は、あくまで一つの要素であって、その金属組成だけで三角縁神獣鏡を舶載鏡であると理解してはならず、むしろ先に示したとおり総合的にみれば三角縁神獣鏡は仿製鏡であるとするのが妥当と考えます。

前回の例会の話題

- ・卑弥呼の時代の紀年鏡 一宮市 畑田寿一
- ・三角縁神獣鏡はどこで造られたか? 刈谷市 酒井 誠
- ・中平名大刀の来歴について 東海市 大島秀雄

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 12月17日(土) 13時半～
- 2 場所 名古屋市政資料館

■ 来月以降の例会

1/21(土)、2/18(土)、3/18(土)

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田) toukaikodai@yahoo.co.jp

- 投稿締切り日 12月31日(土)

■ 投稿文の文字

タイトル 18ポ イトMSゴシック
見出し 12ポ イトMSゴシック 1, 2, 3
小見出し 12ポ イト明朝体強調 (1) (2)
本文 12ポ イト明朝体
写真・グラフ 細かすぎず明瞭なもの。